



## 福井地震の体験談

前号に引き続き、1948年（昭和23年）6月28日（月）に発生した福井地震について、被害を受けた福井県福井市で被災された方々の体験談の紹介です。

### 福井県福井市 Aさん

数日来晴天つづきの空には、初夏の熟れきった陽光が射りついているが、梅雨気色の未だに抜けきらない天候は、埃っぽい福井の街々に重く垂れ込んで、宛ら埧塙のなかに包まれたような蒸暑さに、滲み出る汗の匂いと息苦しさを覚えながら、勤務先から帰路についたのは午後4時30分ころだったと記憶している。

戦災の惨禍から曲りなりにも建ち揃った商店街は、軒高の低いせいもあり日蔭が少なく、恰度西陽に向かって歩かねばならない私の歩行も全く渋り勝ちだった。

片町通りへ出て国際劇場の前を過ぎると、沢山の自転車が並列し、白の半シャツ姿の青年や、ショートスカートに下駄履きの事務員風の娘たち5、6名が入場券を買っていた。相当の客入りらしいので一体何が上映されているのだろうかと思立止って絵看板を見上げると、上原謙、田中絹代共演の“愛染かつら”を演っているらしい。私はこうした感傷映画に興味を持てないのでそのまま立ち去ったが、あの看板に描かれた俳優の似顔が妙に印象的に脳裏に焼きついて離れなかった。

呉服町通りから西国橋を渡り毎日の順路を辿って、市営住宅南側の露路へ入って約15歩、突然ゴーツと異様な地鳴りが聞えて目前がゆらゆらと揺れ出した。地震だなあーと直感して私は小路の中央にそのまま蹲ってしまった。顔をあげると樹木や家屋が不規則に波打って振動する。それは水中から這いあがった動物が、身振りするそれに似ている。と同時に今迄太陽の光と空の蒼さ以外に何も映じなかった周辺一面が銀梨地の褪せいろに近い白ちゃけた無気味なぞっとする光彩（この発光現象は輝きのないものの反射能の失われたもの。そしてこの現象に直面した瞬間、私自身人類滅亡の時が来たのだとそう思ったのは事実だ。）に包まれ、忽ち巨大な濁音と共に私の体は四尺位後方（北から南へ）の狭い畑地の中へ放り出されてしまって起き上がる力もない。瞬間私の周辺の建物という建物は悉く、小田原提灯を畳むように、実に鮮やかに裂音を立てて崩壊してしまった。

漸く頭を上げると、福井の市街は跡形もなく、荒野のそのの如くに目を遮ぎるものもなく、僅かに県庁舎、市庁舎、人絹会館等のコンクリート建造物のみが墓石のように突き立っている他は、遙かに市街地を大きく取り巻いている緑の山脈が、悠然と凶変を知らぬ顔に聳えている。全市の倒壊から起こった土煙は濛々と舞い上がり、泥臭い南風が、私の耳と言わず眼と言わず微塵になって襲って来た。

漸く我にかえって自宅の方を見れば、市営住宅は奇蹟にも倒壊をまぬがれている。雀躍して倒壊家屋を乗り越えて自宅に駆けつけると、玄関には妻が茫然と佇っている。屋根瓦は跡形もなく両側に飛び散り、室内は混然として足の踏み場もない。南庭の井戸水からは真赫な濁水を熾んに噴き出している。

住居は助かったと先づ安堵したが子供たちの姿が見えない。妻に質すと近隣の知人の宅へ出かけ

ていないと答える。

私は夕餉の仕度をしていたらしい妻に竈の始末を命じて、余震の止まない空を飛ぶ様に知人の宅へ駆けつけて見ると、最近漸く竣工した建物は、無惨にも前のめりになって道路を塞いでいる。

附近の人達の右往左往するなかに、次娘をかかへて戸惑っている義姉と義母の姿を捉えて、突嗟に叱るように私は長女と末娘の所在を確めた。義母が泣き声もしどろもどろに指さす足元を覗くと、折り重なった木材の下に、押しつぶされたまま、長女が両手を泳がせながら救いを求めている。蒼白く怖えた顔がたまらなく悲愴に映った。

末娘はと問えば矢張り家屋の下敷のなかに居らしいとの事。早速折れ損じた柱を僅かばかりの空間に差し込んで折よく来合せた人達の助力を乞うて間隙を作ろうとするが、重なる余震のために思う通りにはかどらない。

長女は苦痛を訴えながら、“私はあとでよいから、aを早く助けて頂戴”としきりに哀願する。

そのうちどうにか乗しかかった木材が浮いて子供を引き出したが、長女は腰部と両腕と口唇に裂傷を負っていた。然し恐怖のため一言も痛みを訴えなかった。

これが了ると私は早速末娘を捜し出すために次の工作に取りかからなければならなかった。

然し到底絶望だと断念していた末娘は、崩壊した壁土のなかから幸運にも無傷のまま救出することが出来て、妻の腕に抱かれたが、土埃のため、両眼は殆ど失明に近かった。

私は家族に一人の犠牲者もなかった事に始めて心の安まるをおぼえ、助力して貰った近隣の人達の厚意を謝して自宅へ戻った。

回想すれば、誠に奇縁な運命であったと思う。私自身は戦災の折は火災に包まれたまま、自宅の裏庭の小川のなかで生命を取り止め、今回は亦激震の瞬間、僅か一坪くらいの空地に偶然自体が置かれてあった許りに命を全うすることが出来た。両者何れも生死の分岐点を彷徨したことに変りはない。

妻や長女、次娘も亦戦災の折は降りしきる焼夷弾を縫い、燃えさかる路上を飛びこえて郊外に避難し、漸く生死の境を脱し、再び未曾有の震災に遭遇して、悲運を負わなかったという事実は、科学めいた論理では些か解決に苦しまざるを得ないのではないかと想う。

刻が経つにつれて、遠く近く肉親を呼びあい救いを求める声が、相次いで襲う余震の不安な空気のなかに交って、悲しき挽歌のごとく聴えてくる。空は濁り、陽は已に落ちて、市の中心街あたりから、すさまじい黒煙の立ちあがるのを私は見た。

私は、人間の無力さに限りない憎悪を感じずにいられなかった。

## 福井県福井市 Bさん

私はじっとり汗ばむ程の蒸暑さに、足もだるく、曇った空を見上げつつ「何てむすのだろう」とつぶやきながら市役所の前を通り過ぎていった。そして福井神社の入口を過ぎ、お濠に沿って歩きながら、風ひとつない暑さに何か重苦しさを感じていた。

こうしてもものの5、6米も歩くか歩かないかに、物凄く地鳴りがして、私は、反射的に後を振り向いた。何か空気を震動させる様な地鳴りと思う間もなく、本能的に夢中でお濠端から離れようとした。2、3歩走らないうちに、轟然地響きと震動で、私はどおっと横倒しに道路にたおれてしまった。ころんでもなお私は起き上がり、駆け出そうと努力したが駄目だった。手で体を支えているのが精いっぱい、目前にはただ動く地面と稲妻のような地割れが見えるだけだった。

私は手や指先が小さな地割れに食い込まれはしないか、いまにこの地割れに挟まれはしないか、いまにこの地割れに挟まれて死ぬのかも知れないなどと思いながら、不気味に動く地面を見つめて

いた。

やがて夢からさめたように起き上がったときには、四辺は薄暗くなり、息が苦しく、空は見えないまでに土ぼこりが発ち、また私の服は水で濡れていた。どこから水が出るのか、多分地割れから出たのであろう。気がついて見ると、膝頭と腕にすり傷して出血していた。

あたりを見ると、もうもうたる土煙の中を、人々が走る。走る。ただひたむきに走っているの、私も促されたように走り出した。ゆり返しが来た。ちょっとばかりひよろひよろとしてまた走った。だからあの辺（県庁前）のことははっきりした記憶がない。ただ人々と一緒に家に向かって走っていただけであった。あまり吃驚すると、何が何やらわからなくなるものだと思った。

ちょうど三ノ丸郵便局のあたりで、子供の泣く鋭い声にふと我にかえり立ち止った。私の目に映ったのは、家の下敷になった母親らしい人の姿である。上半身が家の外に出ているが、腕も顔ももう紫色に変わり、目をそむけたくなるくらい。「お母さん、お母さん」と呼び続ける女の子の悲痛な叫びに、私はどうかしなければならぬと思ひ、あたりを見廻わしたが、誰も彼もが狂ったような顔をして一生懸命に走っている。呼び止めようもなかった。私のそばを5、6人の会社帰りらしい男の人達が通りぬけた。救いを求めたが、皆ただならぬ顔付をして、カバンを小脇に抱え込んでサァーッと走り去ってしまった。それを見て私も「あっ、これは大変だ、私も走らなくては」と思って、ちょっと目をつむってまた一散に走った。「よくまあ」と思うほど人々は走りざわめいていた。

三ノ丸を過ぎ、知事公舎の横を通り過ぎた。その間に電柱が倒れている。電線が地を這っている。硝子のかけらが飛散している。また水が噴き出している所もある。そこには負傷者が横たわっている。ぞっとする光景だ。

国道筋へ出ると、私は立止って息をついた。口の中はカラカラで眩暈するほど苦しく、もうそこへ座りこみたいような気持でいっぱいだった。土煙はおさまったようだが、街の方を振りかえると黒煙がもうもうと立ちのぼり、空を暗くしていた。黒い煙に不吉な予感がして気をつけて見ると、今まで両側にずっと立並んでいた街並が、野原のようにがらんとしているのである。私は戸惑ってしまった。いつもは歩き易いコンクリート道なのに、物凄い地割れのために歩行が困難となっている。息苦しさや恐怖で頭が変になりそうだった。後から後からと走ってくる人は、皆知らない顔をしてドンドン追越して行くので、心細くなったが、私もまた泣き泣き走った。母の名を呼びながら狂人のように人の先になり、後になりして走った。

倒れている家などは一々見ることもなかった。見えるのはただ道だけである。コンクリートの舗装が割れて一尺ほどもずれ、下の方に見えている所もあり、コンクリートのスラップが重なりあっている所もある。その重なりは、5、6寸から1尺あまりのものもあつた。とても凄い地割れだ。一瞬の出来ごとにしては、あまりにもひどいと思った。あの長い国道筋がいたるところコンクリートの割れや重なりがあるので、走って帰るには本当に困難な道であった。

帰ってみると、わが家は東北へ傾いて全壊していた。何か取り出したと思っても、入口がなくてはいれなかった。近所で、倉の下敷きになり内出血で死んだ人や、逃げ遅れて家の下敷きになって死んだ人が数人あつた。時折り地鳴りがして人々を怯えさせた。皆不安な顔付けをして「地面が沈んでしまう」とか「今後またあの大きいのが来たら駄目だ」とか話合っていた。

2、3日して、初震のとき私が倒れた県庁前のお濠端へ出かけて行って見ると、吃驚するような大きな地割れができていた。人間ぐらいらくに入り込んでしまうような大地割れであった。よくもこんな所を走っていたものだと思った。考えてみると、あの私が走り出した時こんなに大きな地割れができていたら、走ることも出来ず、どんなにか困難に感じたろうと思う。たしかにあの時はビ

リビリと稲妻のように地割れがしたが、幅はそんなに大きくなかった。あとからだんだん割れ目が拡がったり崩れたりしたのであろう。私が県庁前の地割れのところで倒れたことを知っている人は、あの大きい地割れの中へよくもはいらなかったものだ、よくも生きて帰れたものだと思議がっておられた。

## 福井県福井市 Cさん

私達の一生を通じて忘れることの出来ない一番悲しい思い出は、福井を襲った大地震です。私は学校から帰って机の前にすわり、えんぴつを持とうとすると、どこからか「ゴウー」というものすごい音が聞え、その瞬間体がぐらぐらと振動しました。「あっ地震だ」と私は何もかも忘れていちもくさんに外へ飛び出しました。動きが烈しいので何辺もころびそうになり、どうやら外へ出られたかと思った途端、家が私の目の前に掩いかかり、まっくらな砂煙がそこら一面にたちあがりしました。

すこし静まってから四方をみると、家は皆一度につぶれて、まもなくあちこちに墨の様な煙がたちあがりしました。その時私は、もう日本一の復興もだめだと思いました。余震が幾度もくる。私達のそばにいる人々は、あまりのおそろしさに真青にふるえているのでした。どこからか「花子」「花子」とわが子をよびさげびながら走って行く人もありました。暫くすると、地割れの中から水がふきだしました。

夜が近づいてから、暫く砂の混入した御飯をいただいた人もありましたが、中には何も食べない人も沢山ありました。私は怖ろしさに胸がつまっているので、どうやらいちぜんいただいただけでした。

だんだん暗くなるにつれて、あちこちにたちあがった墨の様な煙が真っ赤となり、それが刻々火の海となっていきました。私は早く真赤な火が消えますようにと心の中で念じているうちに、いつのまにか大声となってしまいました。私はあのおそろしい地震のため、一夜少しもねむれませんでした。

夜明けになって人々は始めて自分の仕事にはげみにかかりました。そしてその日の夕方までには、どうやら小さな小屋がたちあがりしました。夜になると、蚊がぶうんぶうんとやってくるので、ろくに眠れませんでした。他の県や市町村からたくさんの方々が応援にきて下さいましたが、私はその人達を見ると、ああ私達のために応援にきてくださったのだと、涙があふれてくるのでした。

焼跡へ行って見ると、何一つもない広っぱになっていました。それを見ると、私は気の毒になりました。あの日から苦しい生活がつづけられました。日での続く暑い日に、私達は一生懸命つぶれた学校のあとかたづけをしました。瓦まくり・瓦運び・木材運びなど、汗まみれになって色々と先生のおさしずをまもって励みました。家に帰ると、もうくたくたにつかれてしまいましたが、それでもがんばってまた家の仕事の手伝いもしました。地震のため水道の水がでなくなったので、私達は水の出る所までくみに行きました。

それからのちだんだん学校もかたづけ、私達はアメリカのテントをかりて、そこで勉強をする事になりました。

震災後の福井市は、都市計画で道が広がるため、どこを歩いてもぬかるみばかりでしたが、今では道の両側には並木を植え、震災前よりみちがえるほど、立派に復興しました。

(注) 出典：「福井烈震誌」(福井県福井市発行) から一部転載